

(第47回) 音楽鑑賞会

紀尾井ホール室内管弦楽団第132回定期演奏会
(2022年9月23日、24日)

去る9月23日と24日、紀尾井ホールにて、第132回紀尾井室内管弦楽団の定期演奏会としてトレヴァー・ピノックの第3代首席指揮者就任記念コンサートが開催された。プログラムはワーグナーのジークフリート牧歌、ショパンのピアノ協奏曲第2番へ短調、シューベルトの交響曲第5番変ロ長調で、アイアン・クラブからの参加者は23日が3人、24日が13人とのことであった。トレヴァー・ピノックは4月に就任記念コンサートでタクトを執る予定であったが、急病で来日できなくなりこの度満を持しての登壇となった。



クラシックを聴くのは好きではあるけれど日頃そんなに熱心に聴いているわけでも詳しいわけでもない。そんな私でもほとんどの回に足を運んでいるのが紀尾井室内管弦楽団の定期演奏会である。それはこの演奏、企画ともに素晴らしいからの一言につきるのであるが、単にソリスト級の腕を持つ演奏者たちの集団だからではない。何度も練習を重ね、トレヴァー・ピノックのような素晴らしい指揮者に恵まれて音楽を作り上げていくのはもちろんのこと、ホールの響き、アンコールを含めた選曲、その他企画、運営も含めてあらゆる方々のご尽力の賜物であると推察する。今回初めて鑑賞記というものを書くにあたり、拙い文章ではあるがその幸せな時間をまだ体験されていない方に、多少なりともお伝えできればと思う。

さて今回は執筆のこともあり、紀尾井では初めて同じプログラムを2日間続けて聴いた。1曲目はワーグナーのジークフリート牧歌。この曲はリストの娘であるコジマが、夫であったワーグナーの弟子ハンス・フォン・ビューローのもとを去ってワーグナーと同居後に、初めての男児ジークフリートを出産して晴れてワーグナーの妻になったのであるが、このコジマの誕生日にサプライズで聴かせるために内密に作曲されていったというエピソードがある。クリスマスでもあるその日、コジマの寝室から下まで並んだ演奏家をワーグナー自らが指揮をして演奏された。楽劇ジークフリートのモチーフなども織り込まれた穏やかな愛溢れる美しい曲で、繰り返し演奏されるシンプルなメロディーが次々と展開していく。トレヴァー・ピノックといえば古楽に精通し自らもチェンバロを演奏するとのことであるが、ワーグナーのこの曲は欧州の室内オケと何度も演奏しているというからお気に入りの曲なのであろう。人生には何度か例えようもなく幸福な時間というものがあるが、まさにワーグナーのそれを追体験できるような、自らも幸福感でいっぱいになるような曲であり、またそれを忠実にかつ聴くものの感情を豊かにするような演奏であった。



2曲目はショパンのピアノ協奏曲第2番。今回初来日となる注目の2007年生まれ、若干15歳のピアニストであるアレクサンドラ・ドヴガンの登場であった。15歳といえはまだ中学3年生か高校に入ったばかりか？しかしながらステージに現れた瞬間の落ちついた佇まいは、卓越した演奏技術も含めて既に成熟した大人のような印象を与え、きめ細やかなタッチで情感溢れる演奏を聴かせてくれた。この曲は甘美な第2楽章において、同じワルシャワ音楽院の音楽科学生コンスタンツィヤへの想いが込め

られているという。（「僕はこうしてあの理想の人に忠誠を捧げ、夢に見てきた。その思い出ゆえに僕の協奏曲のアダージョができ～」と書かれた手紙が残っている。）作曲家はかくも自分の愛する者への思慕を美しい音楽へと浄化して、時間と場所を超えて我々に伝えてくれるのである。完璧な演奏に熱狂した我々聴衆のアンコールに応じて披露されたのは、初日が同じくショパンのマズルカ第13番イ短調op.17-4、2日目はシロティ編曲によるバッハの前奏曲第10番ロ短調（原曲はヨハン・セバスティアン・バッハ作曲「平均律クラヴィーア曲集第1巻より第10番ホ短調BWV855」）であった。ショパンのマズルカは言うまでもなくショパンコンクールの課題曲にもなるほどの作品で、いずれも小品ながらポーランド独特のリズムと音の構成を持ったいかにもショパンらしく、ある意味で大変難しい曲だが彼女はそれをさらりと弾きこなした。またラフマニノフの従兄弟であるというシロティ編曲によるバッハの前奏曲は、何かと不安の多い現代に生きる私たちのすきんだ心に染み入り、思わず涙が浮かぶほどの美しい音を紡いだ演奏に、誰もが彼女の将来を楽しみにするに違いないことを確信した。

3曲目はシューベルトの交響曲第5番変ロ長調。シューベルトは私たちが子供の頃の音楽の授業では必ず聴くこととなる歌曲集「冬の旅」などの美しい歌曲で馴染みがある作曲家である。寄宿制神学校で恐らく厳格な教育を受けた後に交響曲を一曲ずつ緻密に書き上げていったのであるが、この第5番は19歳の時の作品とのことである。10代で既にこのような曲を書き上げることには驚きを禁じ得ないのであるが、彼が理想としたというモーツァルトのエレガンスともいべき軽やかさが随所に伺われる。小柄ながら情熱的なタクトを振るピノックに紀尾井の楽団員たちが心を合わせて演奏し、その熱演でほぼ満員に近く集まった聴衆を魅了していた。

プログラムが終了した後も拍手は鳴り止まない。何回かのカーテンコールに応じてシューベルトの26歳の時の作品であるロザムデ序曲から間奏曲第3番が演奏された。オーケストラのアンコールは定期演奏会においてなかなか聴く機会がないと思うが、今回は新指揮者の就任記念コンサートということもあってであろう。フルコースの後で宝石のように美しいデザートを味わったかのような、最後の最後まで存分に楽しめた定期演奏会であった。



（ベステラ株式会社 仲村清美 記）